

●社会学から考える

「引きこもり」とは何か

「引きこもり」とは、いったい何なのか？ 最初に、このことをまず押さえておく。

「引きこもり」とひと口に言っても、その実際はさまざまである。そこからあえて共通点を取り出すと、つぎの四つがあげられると思う。これらはみな、「引きこもり」を考えるうえで、大事なポイントになる。

●1 思春期に始まる。

小学校、中学校まで、聞き分けがよく、手のかからなかった子が、自室に引きこもるようになった。

●2 対人関係の障害である。

大学で友人になじめず、授業にも出られなくなった。入社した職場でうまくいかず、出勤できなくなった。……。子どもから大人へ、肉体的・精神的に成長して自我を確立するはずの段階でのつまづきが、「引きこもり」である。そして、一度始まると、ほんとうならとつくに一人前の大人としてふるまっていなければならぬはずの年齢になっても、だらだらと「引きこもり」が続く。

●3 対人関係の障害である。

なぜ「引きこもる」のかと言えば、それは、他者と会いたくないからである。特定の誰かが苦手なのではなく、およそ他者と関係を

もつことができない。苦しい。家族と口をきくのもいやである。そのため「引きこもり」である。それは、「引きこもる」こと自体が目的ではなく、対人関係に障害があることやむをえない結果なのだ。

●3 精神病ではない。

「引きこもり」とよく似た状態は、精神分裂病や鬱病といった精神病によってもひき起こされる。精神病かどうかは、専門家が診断すれば、見分けがつく。精神病ではないのに引きこもってしまう場合が、ほんとうの意味での「引きこもり」である。心も身体も、医学の観点からみて病気でないのに、何かの原因によって、他者と関わることができないのである。

●4 長期間にわたって継続する。

短期間で解消してしまえば、「引きこもり」のうちには入らない。

三カ月たっても、一年たっても、三年たっても引きこもったまま。ことによると、十年、二十年を覚悟しなければならぬのが「引きこもり」である。本人と家族に任せておいたのでは、この状態を改善できないから、第三者の介入が必要になる。必要ではあっても、この介入が簡単でないのが、「引きこもり」のむずかしいところである。

*

以上を残らずそなえた現象が、「引きこもり」である。それ以外の要因、たとえば、家族に対する暴力や学校でのいじめや不登校は、「引きこもり」と関係があるかもしれないが、すべてのケースに当てはまるわけではない。

「引きこもり」は、なにが原因で起こるのか、まだよくわかっていない。いつになったら直るのかも、見通しがたない。親や家族が、どう本人に接すればよいのかも、

「引きこもり」の社会学

文◎橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう◎1948年神奈川県生まれ。東京工業大学社会理工学研究科価値システム専攻・教授。財団法人社会経済生産性本部社会政策特別委員会専門委員長として1999年教育改革に関する報告書・最終成案をつくる。その中間報告書をまとめたものが岩波書店発行の『選択・責任・連帯の教育改革～学校の機能回復をめざして～』岩波ブックレットNO.471。

11-0005

方針が立ちにくい。わからないことだらけのなかで、「引きこもり」の本人も、家族も、悩み苦しんでいる。

「引きこもり」はなぜ、長びくのか

わずらわしい人間関係をすべて切り捨てて、一人になりたい。自室にこもったまま、誰にも会いたくない。——これぐらいのことなら、誰だって考えたことがあるだろう。けれども、こういう気持ちには、概して一時的である。実行されたとしても、長続きしない。ところが、「引きこもり」の場合には、自室にこもったまま、何カ月も何年も経過するのである。そこで、なぜ自室にこもるようになったかというきっかけよりも、なぜいつまでも自室にこもり続けるのかという持続のメカニズムのほうに、「引きこもり」にとつては

本質的である。

それではいつたい、どのような持続のメカニズム（いつまでたっても自室から出られない仕組み）があがっているのだろうか。持続のメカニズムは、悪循環（堂々巡り）のかたちをとつていると考えられる。あちこちでよくあげられる例だが、サン・ティグジュペリの『星の王子さま』に、酔っぱらいの話が出てくる。王子さまに、なぜ酒を飲むのかと尋ねられた酔っぱらいは、忘れたいから、と答える。酒を飲む↓酔っぱらう↓自分が恥ずかしい↓それを忘れたい↓そこでまた酒を飲む↓もつと恥ずかしい↓……という悪循環が、できあがっている。そして、酔っぱらいは、この悪循環の構造をよくよく自覚しているのに、そこから抜け出ることができないのである。「引きこもり」の場合も、同じような悪循環があると考えられている。他者と交流するのが恐ろし

て、十分な社会経験を積まないまま、時間だけがどんどん過ぎ、同年代の人びととのギャップが拡大して、社会復帰がますますむずかしくなる。

対人関係の障害↓引きこもり↓自分を非難↓対人関係への恐れ↓引きこもり↓……という悪循環が、「引きこもり」を長引かせる基本的なメカニズムである。

*

「引きこもり」の息子や娘を抱えておろおろしている家族も、この悪循環の一部分である。

まず第一に、部屋から出ない子どもに、毎日食事を作って運び、必要な日用品を買って与え、生活費を負担し続ける家族がいなければ、「引きこもり」は不可能である。親たちはそう思っていないだろうが、彼らが引きこもりをうみだしているのは確かである。いつごろから「引きこもり」という現象が始まったのか、はつきりした

記録はないけれども、子どもが個室をあてがわれ、日本が経済的な繁栄を謳歌した七〇年代以降に、ぼつぼつ報告されるようになった。親が「引きこもり」を認め、経済的に支持しなければ、子どもたちの対人関係障害は、別なかたちをとつたはずだ。

「引きこもり」の子を抱える家族も、孤立している。ほとんどの親たちは、「引きこもり」を恥だと考え、世間から隠そうとする。精神科の医者に相談しようとか、第三者の手を借りようとかは、なかなか考えない。来週にも「引きこもり」が終わり、ふつうの生活を送れるようになるかもしれないという、淡い期待（夢）に望みをつなぐうちに、気がつけば十年がたっている。

「引きこもり」の子どもの親たちは、学校でよい成績をとる、大企業に就職する、といった世間の価値観に同化しすぎて、子どもに

くて、自室に引きこもっている。学校にも行かないし、仕事もしない。世間からは、意気地なしの怠け者と思われている。そのことを、本人が一番よくわかっていて、日々自分を責めている。こんな自分は、許せない。こんな自分に育てた、親が悪い。こんな自分が、他者に受け入れられるはずがない。本人は、自室に引きこもったまま、困惑しており、どうにかしてこの現状から脱出したいと願っている。しかし、そう考えれば考えるほど、失敗は許されなくなり、世間の敷居が高くなる。そこでやむなく、一日伸ばしに「引きこもり」を続ける。そうしている自分自身を許すことができず、焦る気持ちばかりがつのる。こんなはずではない。自分の現状をありのままに受け入れることができず、親の期待にもとづいて描いた高すぎる自己イメージと、みじめな現状との板ばさみになつてあがき続ける。こうし

過剰な期待を寄せてきたケースが多い。子どもは、親の期待に沿おうとして、精一杯がんばり、くたび果て、引きこもる以外にないところに追い詰められる。かけがえない個性であることを認められず、画一的な型にはめ込まれるばかりだったことが、対人関係の障害をうみだしたのではないだろうか。「引きこもり」の子を抱える家族が、「引きこもり」の現実を受け入れ、子どものあるがままの姿を認めることが、問題解決の第一歩になる。しかしそれは、とてもむずかしいことなのだ。

「引きこもり」をうみだす社会的文脈

体面を重んじる親、常識（固定観念）に縛られる家族が、「引きこもり」の温床となるのは確かだろう。けれども、そんな親や家族は、昔からめずらしくなかった。にも

かわらず、「引きこもり」が最近急増しているとすれば、社会の急激な変化が関係していると考えるべきだろう。

高学歴化は、無視できないひとつの背景である。農家や商人、職人といった家業はますます廃れ、高等教育を受けたサラリーマン家庭が人口の過半を占めるに至った。サラリーマン家庭では、子どもが親の職業を継ぐわけではないので、親子関係が希薄になりがちである。子どもには、進学機会と職業選択の自由を与えられるが、それは不安の種でもある。進学競争に勝ち抜かなければならないが、それは何のためなのか。大企業、医者や弁護士は、ほんとうに自分の目標なのか。日本の教育システムは、進学競争に勝ち抜くことしか考えない学校秀才を量産すると同時に、大勢の落ちこぼれをもうみだす。「引きこもり」は、そうした一元的な価値観に立つてそれ以外の価値を無視する姿勢（ニヒリズム）に

対する、抗議の意味も含まれている。

情報化の進展も、「引きこもり」のもうひとつの背景になっている。テレビが普及し、音楽やゲームを楽しむようになり、漫画や雑誌やビデオもふんだんに入手できる。自室にこもっていても情報に困らなくなつた。友達を真剣に作ろうとするエネルギーは、その分しぼんでしまう。映像のなかの理想化された登場人物ばかりをみて、それが周囲の現実よりもリアルに感じられてしまうから、太りすぎてスタイルの悪い自分や他人が許せなかつたり、清潔でない自分や他人が許せなかつたりする。あるがままの人間を受け入れ、交流を積み上げていく能力は、そのぶん弱まってしまふ。

*

こうした社会の変化は、誰にとつても共通しているので、「引き

こもり」はひとごとでない。

「引きこもり」は実際にはやはり、ごく一部の人が陥る病理である。にもかかわらず、「引きこもり」はますます多くの人が注目を集めるようになり、拒食症や不登校と同様、「時代の病」とみなされるまでになっている。

「引きこもり」が注目を集めるのは、それが、いつ自分に起きてもお不思議でないから。自分たちにも、同様な病理がひそんでいると思えるからではないだろうか。人につきあつていても、自分が受け入れられている気がしないという不全感。自分だけは特別でありたいと思いつながら、結局は世間並みの価値観に支配されて、自分のやりたいこと、自分のやるべきことがみつからない焦燥感。自室にひとりであるあいだけ、ありのままの自分でいられるという全能感。これらの歯車がひとつ噛み違えば、「引きこもり」の悪循環にころげ

落ちていってしまうかもしれない。

それを、紙ひとえのところ踏みとどまっているというのが、多くの人がびとの実感なのである。

「引きこもり」になつてから、適切な手を打つことも、もちろん大切だ。しかし、もつと大事なのは、「引きこもり」をうみだす社会のあり方にメスを加えて、根治をはかることではないだろうか。最後に、このことを考える。

「引きこもり」の処方箋

あなたの息子や娘が、「引きこもり」になつたとしたらどうしよう。

最初はしばらく、様子をみるのもよいかもしれない。失恋のショックで、ふさいでいるだけかもしれないし、すぐ直つてしまうことだつてある。精神病の場合には、医師に連れて行かないといけない。けれどもそれも、三カ月が限度。

「引きこもり」も半年から一年をすぎると、状態が固まつてしまい、そこから抜け出すのがむずかしくなる。こんなに引きこもっている自分はなんてだめなんだ↓そんな自分外に出て行くわけにはいかない↓結局引きこもり↓……という悪循環が、本格化してしまうのである。

「引きこもり」を、引きこもっている本人（だけ）の責任だと考えても、問題は解決しない。それどころか、ますます悪くなる。「引きこもり」は、親子を巻き込んだ家族病理（人間関係のシステム）である。親が「引きこもっているのは子どもが悪い」と思つて責めることと自身が、「引きこもり」を強化するのである。親も、「引きこもり」の当事者であるという自覚が必要だ。

この点をよくよくわきまえ、家族外の第三者の手助けをおおがなければならぬ。家族の内部で簡

単に解決できるぐらいなら、「引きこもり」とは言わない。医師なり、カウンセラーなり、民間団体なり、外部の適切な介入と援助を求めなければ、「引きこもり」は解決できないと覚悟すべきである。

*

さて、介入をおおぐ専門家としては、まず、精神科や心療内科の医師であろう。

医師が「引きこもり」にかかわるケースは増えつつあるが、問題がないわけではない。医師はふつう、患者を問診することを要求する。患者と会つて、はじめて診断がつき、治療が開始されるのである。本人に代わつて家族が、いくらか医師に実情を訴えても、それだけではだめなのだ。そもそも、引きこもっている本人が医師に会いに行けるぐらいなら、「引きこもり」とは言わない。つまり、もつとも深刻な「引きこもり」の場合、医師が最初のきつかけにはなりに

く。

いっぽう、医師のよい点としては、薬剤を処方できること。また、鬱病や神経症など、「引きこもり」とよく似た症状を示す患者を、見分けることもできる。

医師とよく似た立場にある専門家として、カウンセラーがある。カウンセラーも、「引きこもり」を手がける例が多くなっている。

カウンセラーで心配なのは、経験や技量の個人差があつて、効果がまちまちなこと。そして、カウンセラーが下敷きになっている理論が、「引きこもり」を悪化させてしまう場合もあることである。たとえば一部のカウンセラーは、しばらく前まで、引きこもつた子どもが親に暴力をふるうと、「じつと我慢して受け入れるように」と指導した。この結果、暴力がますますエスカレートし、耐えかねた親が子どもを殺害するというような悲劇も起こつた。いつ、どのよ

うな方法で適切な介入を行なうか、専門家とされるカウンセラーにも見極めはむずかしいのである。

もう少し違ったタイプの専門家としては、民間団体(たとえば、「タメ塾」)がある。こうした民間の専門家は、カウンセラー以上に個人差が大きいので、親としては十分に説明を受け、どのような助力がえられるのか、理解しておく必要がある。

民間の専門家のよい点は、家庭を訪問してくれる点。経験をつんだ専門家は、根気よく毎週やってきては、タイミングをみて本人と面会するなど、適切な介入を行なうことができる。「引きこもり」は、医学的にみて病気ではないのだから、こうした民間の専門家の介入によつても十分な効果を期待できる。

民間の専門家の欠点は、かなりの費用がかかること。そして、まだまだ人数が少ないので、よい専

門家を探しあてるのが大変なことである。

ほかにも、「引きこもり」の若者のためのサークルや、たまり場など、役に立ちそうな施設は多い。これらを有効に組み合わせて、一刻も早く「引きこもり」に手を打つべきなのである。

「引きこもり」をうまない社会

自分の子どもが「引きこもり」になつてあわてるより先に、「引きこもり」をうまない社会を構想することはできないものか。

学校と家庭のあり方に限定して、この点を考えてみよう。

学校は、学校的な価値観を相対化する必要がある。学校は、勉強を教えるところであるが、それだけであることをはっきりさせる。学力でははかりきれない人間としての価値があることを、あらゆる

機会に強調する。そして、子どもたち(児童・生徒)を一律に、ひとつの基準からみることがやめる(たとえば、偏差値や相対評価をやめる)。一人ひとりが違つていてよいのだ。あなたはあなたのままでよいのだ。ということ、子どもたちにはつきり伝える。

学校が、画一的な集団教育を行なつている限り、自分を周囲に合わせようとせず、自分を見失う若者が出てくる。子どもが学校に合わせるのではなく、学校が子どもに合わせることを。学習指導要領のような画一的なカリキュラムを改め、個人にあつたカリキュラムを一人ひとりに用意すること。学校ごとの自主性を最大限に尊重し、校長の権限によつて多様な教育ができるようにすること。こうした改革が、「引きこもり」をなくすために、どうしても必要になる。

*

いっぽう、家庭も、学校や世間

の価値観から自由になる必要がある。子どもは、一人ひとり違つた個性をもつた存在である。その違いは違いとしてありのままに認め、無理やり、世間の標準(決まりきつた枠)に子どもを押し込めない。子どもの声、子どもの感情に耳を傾ける柔軟性が、親に対して求められる。

これは、子どもを甘やかすことではない。社会に出ていくに当たつて、子どもが身につけるべき行動様式や価値観は、きちんと子どもに伝える。いまの親たちには、過剰な関心と極端な無関心が同居している。学校の成績や進学ばかりを気にするわりに、子どもが学校で何を学んでいるのかまったく関心がない。こうした親に同化すれば、子どもは自分の成績ばかりが気になつて、ゆっくり友人関係を築きあげるゆとりがない。学校にいじめがはびこるのも、こうした親の態度が背景になつている。

学力以前に、子どもが自分を大事にし、他者を尊重することのできる、社会性を重視すべきである。自分も相手も対等な人間であつて、自分が相手を評価するように、相手も自分を相対化することができるといふことを理解させ、体得させる。こうして他者(友達)と共に生きる能力が身につくなら、もはやささいなきっかけから、「引きこもり」に逃げ道を求める必要はなくなるに違いない。

*

「引きこもり」は、日本のいまの社会がどのように病んでいるかを示す、ひとつの象徴的な現象である。これに気づいた人びとによつて、よりよい社会を構想する新しい努力が始まるのなら、何年も自室にこもっている大勢の若者たちの苦しみも、まったくの無駄ではなかつたことになる。